

An Analysis on the Structure of Tenderness in Contemporary Adolescents

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/617

現代青年におけるやさしさの構造に関する分析的研究

金子 勲榮・村井 仁*

An Analysis on the Structure of Tenderness in Contemporary Adolescents

Shoei KANEKO and Hitoshi MURAI

問 題

「やさしさ」という言葉は現代社会に深く浸透し、溢れるほど囁かれてはいるが、「やさしさ」という言葉に現代的な意味が付与されたのは1960年代から70年代にかけてという比較的最近のことである(栗原 1981)。

栗原(1981)は、やさしさの歴史についてその誕生と変容の過程を社会的イデオロギーのダイナミズムの中で読み解いている。すなわち、やさしさとは高度経済成長下における産業主義という主導體制に対するカウンターカルチャーとして生まれたと説明する。管理と合理による効率重視の社会編成の中心は国家であり、企業であり、企業人たる成人男性であった。こうした社会の、周辺部に生きる主婦・学生・社会的弱者等が生産力主義へのアンチテーゼとして自らを守るべく打ち出した「共生」の概念がやさしさであった。

こうしたやさしさは、管理と効率の揺るぎがない体制の中で変質を迫られる。やさしさは生産力主義と真っ向から対立するのではなく、厳然たる社会体制に対し、「大事なものを抱えてすり抜けてゆく」いわば「賢さ」を身につけ、「逃走するやさしさ」へと変容した(栗原 1981)。大平(1995)は、この変容を「傷を舐め合うようなやさしさ」から、傷付け合わないようにする「予防的なやさしさ」への変化と表現している。「治療」から「予防」へと移り変わる過程で、

やさしさには2つの側面が生まれた。一つは従来からの「価値」としての意義であり、今一つは「予防的」側面から誕生した「対人技能」としての意義である。現代においてやさしさは、社会的に望ましい価値意識として捉えられながら、社会生活を営む上で生じる軋轢の緩衝材=道具としても要請されている。高度に情報化と個人化の進んだ現在のストレス社会において、やさしさは道具的な対人技能、社会に対する潤滑油としての性格をますます強めてきた。高尚な価値でありながら、卑近な処世術でもあるという、この二面性が、やさしさの実体を曖昧にする、否、明瞭にさせないのであろう。現代において重要かつ複雑な位置を占めるやさしさの意味を探ることは、社会とそこに生きる人々の現代的性質を知る上で有効な手がかりを与えるものと考えられる。

さて、こうしたやさしさに関する実証的研究とはいえば、あまり見当たらないが、例えば中田(1996)では、やさしさについてその因子的構造が分析されている。そこでは、「問題を抱えた人への働きかけ」「内発的な動機」「受け手の気持ちの先取り」「相互関係の回避」という4因子からなる構造が見出され、これらと対人態度や行動傾向との関連について考察されている。ただし、中田(1996)は、「具体的な行動として現れるやさしさ」のみを取り扱い、気持ちや心情といった側面はあまり考慮していない。だが、先述したとおり、現代におけるやさしさには「対人技能」として行動する際に道具的に使用でき

るやさしさとともに、「価値」としてのやさしさも確かに受け継がれている。この二側面を不可分のものとして構成されるやさしさを探るには、やはり気持ちや心情といった内面的な部分も考慮する必要があると考えられる。

また、やさしさの近傍にあると考えられる概念として、従来議論されてきた「思いやり行動(向社会的行動)」が挙げられる。中田(1996)でも、思いやり行動の特定の領域(例えば、思いやり行動の「小さな親切行動」とやさしさとの類似性を指摘し、やさしさの構造を分析する際に指標の一つとして参照している。もちろん、これらの研究は文字通り、行動であって、気持ちや雰囲気などやさしさと重ならない部分も多いが、やさしさを考える上で多くの示唆を提供する。

中でも鈴木(1992)の提示した向社会的行動に関するモデルは、やさしさについてその社会的メカニズムを考える際にも参考となるものであると考えられる。鈴木(1992)は向社会的行動の起因として共感性、社会的スキル、外向性の3要素に注目し、内、共感性と外向性の影響を見出している。

やさしさが人・社会と関わろうとする技能であり、価値である場合、外界(社会)を認知し、働きかけていこうとするメカニズムが重要である。やさしさを対人的文脈に発生する心理的物理的現象と考える場合、外界を知るための「受信機能」と外界に関わろうとするための「発信機能」が想定される。これらは、従来議論されてきた心理学の範囲から、それぞれ「共感性」と「外向性」に相当すると考えられる。これは鈴木(1992)のモデルと部分的に一致する構造である。ここで社会的スキルを考慮しない理由は、第一点として、やさしさ自体が社会的スキルとしての性質を内在させていることが挙げられる。先述したように、やさしさには対人技能として社会に関わる(関わりのストレスを緩和する)機能を持つ。第二点としては、やさしさは価値という極めて内的な側面も持ち合わせてい

るということが挙げられる。すなわち、行動として現れなくてもやさしさは個々人の内面に存在し、必ずしも他者から観察可能である(やさしさだと認識できる)とは限らないからである。

さらに、やさしさの「対人技能」としての側面に注目すると、行動傾向・対人態度の違いによって、やさしさの現われ方が異なるということも推測される。対人態度の相違によるやさしさの差異を知ることは、人付き合いの技能としてのやさしさがどのように現われてくるか理解する上で重要な視点となるだろう。この点に関しては、上野ら(1994)の研究が有効な指標を与える。上野ら(1994)は、友人への同調と、友人との心理的距離の取り方という2点から、青年期における交友関係のスタイルと問題点について論じている。同調性と心理的距離という2軸から説明される交友関係の類型(表面的交友、密着的交友、個別的交友、独立的交友の4類型。Fig. 3参照)は、青年の対人態度について、現代的な問題点・特徴を明らかにしている。こうした交友関係における特徴とやさしさとの関連を測ることで、対人的文脈におけるやさしさの現われ方を理解できると考えられる。

本研究は思いやり行動等の観点も参照しつつ、それだけでは拾い切れない非行動的性質も含めて、現代社会に広く根差した「やさしさ」の実体に迫ろうとするものである。具体的には、下位概念を含むやさしさの構造を探るとともに、やさしさに影響を与える要因とメカニズムを検討する。また、対人関係におけるやさしさの関連を明らかにし、やさしさの特徴を見出す。こうしたやさしさという切り口を以って現代社会の一端を理解する助けとしたい。

目 的

現代青年を対象に、やさしさの構造と対人関係におけるその特質を探索的に検討する。具体的には、以下に示す事柄を明らかにすることが本研究の目的である。

1. 「やさしさ」という曖昧な構成概念の構造(下位概念)を検討する。具体的には、「価値」と「技能」という二面性を備えたやさしさの機能を念頭に置き、中田(1996)において見出されたやさしさの構造を、気持ちや心情といった側面も含めて改めて検討する形で、その下位構造を探る。

2. 「やさしさ」と語感の近い言葉に「思いやり」が挙げられる。この言葉の構成を見ると、「思い」+「遣り」と分解できる。これにも象徴されるように、「やさしさ」とは、人との気持ちを汲み取り、働きかけてゆくことのできる技能ないし価値と考えられる。

こうした、やさしさを機能せしめる原因を探るため、従来の心理学で議論されてきた共感性と外向性という概念をもとにFig. 1に示すような仮説モデルを設定し、やさしさに影響を与える要因について検討する。

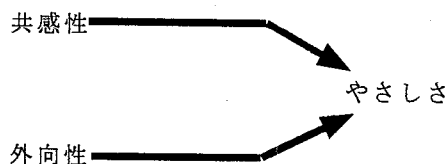


Fig. 1 仮説におけるやさしさの因果モデル。

3. 「やさしさ」とは「価値」であると同時に「対人技能」(対人関係における潤滑油)としての性質を持つものでもある。従って、行動傾向・対人態度の違いによる差異が認められる可能性もある。ここでは交友関係という対人場面を通してやさしさの特徴を探る。交友関係を類型化するにあたり、指標として同調傾向と心理的距離を取り上げ、これらとやさしさとの関係を測ることで、対人関係におけるやさしさの特性を探る。すなわち、「心理的な身近さ(心理的距離の近さ)と、相手に応じる態度(同調性の高さ)を持った者が、よりやさしい」という仮説を検証しようとする。

なお、研究対象として青年という世代を選んだ理由は、(1)やさしさを創造し、担ったのが産

業社会の周辺部に位置付けられていた青年等であった点(栗原 1981)、(2)やさしさの変容の渦中にあり、その媒体となっているのが青年である点(大平 1995)を考慮し、やさしさの実像を理解するのに最適であると考えられたためである。

研究 1

目的

現代青年の捉える「やさしさ」の具体像を確認するため、大学生の記述を収集し、分類することを目的とする。

方法

調査対象：国立大学教育学部学生106名(男子18名、女子88名)。回答者の年齢範囲は19-22歳であった。

調査時期：1996年4月。

手続き：「『やさしさ』に関するアンケート」という名目で、以下のような具体的質問に対し、自由記述による回答を求めた。所要時間は30分程度であった。

1. 「やさしさ」「やさしい」とは、どういうことだと思いますか。
2. 「やさしさ」は大切なものだと思いますか。
3. 「やさしさ」を別のものに例えると何になると思いますか。
4. 「やさしさ」という語から、どういう言葉が連想されますか。
5. 「やさしい気持ち」とはどういう気持ちだと思いますか。
6. 「やさしい行為」とはどういう行為だと思いますか。
7. 人は誰でも傷つきやすいものだと思いますか。

結果

各質問に対する回答から、現代青年の捉えるやさしさについて、次の8つの側面から理解さ

れる全体像が明らかとなった。

- (1) 援助・親切・譲り合い：具体的・実践的な行動として助ける(助け合う)という側面。
- (2) 愛・思いやり・他者理解：相手の心情へ寄せる自己の内的な気持ち。
- (3) 気配り・配慮・いたわり：相手を気遣うという側面。(1)ほどに具体的かつ積極的な行動とはならず、消極的で干渉がより少ない。(1)と(2)の中間に位置付けられると思われる。
- (4) 許容・受容・安心・穏やかさ：相手の存在・行動・気持ち等を素直に受け入れる態度。
- (5) あたたかさ・やわらかさ：感覚的に感じられる印象やイメージ。
- (6) 献身：行動としての側面だが、他者への意識が強く、自己の状況を顧みないという側面。
- (7) 幸福・感謝：満足感や充実感など満ち足りた気持ちが自己へ向いたり(幸福)、他者へ向いたり(感謝)する側面。
- (8) 厳しさ：思いやりの前提はあるものの、行動として厳しい態度が表われて見える側面。

現代青年が捉えるやさしさの具体像は、ほぼこうした印象のものであると窺える。

なお、中田(1996)によって作成されたやさしさについての質問紙と、結果とを比較すると、中田(1996)には、上記(2)(4)(5)(6)(7)などの側面を測定するような項目があまり採用されていない。これは、中田(1996)がやさしさを行動の観点から扱っているためであり、予想された結果である。そこで、以上の点を踏まえ、改めてやさしさを測定する質問紙の作成を試みる。

研究 2

目的

研究1および先行研究から得られた知見のもとに、やさしさと、対人関係(交友関係)・外向性との関連を明らかにしたい。そのため、以下に示す各尺度を作成する。

(a) やさしさ尺度：一般的に考えられるやさし

さを測定する尺度。

(b) 交友関係尺度：同調傾向・心理距離の2軸によって、交友関係の態度傾向を測定・類型化する尺度。

(c) 外向性尺度：社会的外向性を測定する尺度。

方法

質問紙の構成：

(a) やさしさ尺度

やさしさそのものを測定する尺度としては、中田(1996)のやさしさ測定尺度が挙げられるが、他にはあまり見当たらない。また、中田(1996)の測定尺度も主にソーシャルサポートや向社会的行動を測定することを目的とした質問紙を参考に作成されており、行動面からやさしさを理解する内容となっている。定義の困難さから「やさしい気持ち」という内面的な側面を敢えて盛り込まず、観察可能な「やさしい行動」からアプローチすることを狙いとしているのである。従って、やさしさの一般的な雰囲気や感情的な性格を測定することができない。

そこで本研究では、こうした問題点を解消し、同時に中田(1996)の尺度に採用された質問項目の妥当性を再検討する意味も込めて、中田(1996)の尺度を基本にやさしさを測定する尺度を再構成する。具体的には、中田(1996)で見出されたやさしさの4因子構造や研究1によって明らかとなった8つの側面を中心に、やさしさに関する24項目から成る尺度を作成した。

ただし、中田(1996)における第4因子「相互関係の回避」という側面に関しては、ここで作成されるやさしさの測定尺度への採用は見合わせた。その理由は、「相互関係の回避」が、大平(1995)による現代的やさしさ(詳細は大平(1995)を参照)に見られる性質を盛り込んだ内容となっているが、その叙述を質問項目として構成する際に簡潔化を迫られ、その微妙なニュアンスがやや失われているきらいがあるためである。この点に関しては、改めて現代的やさし

さを独立した形で扱えるよう、今後検討することとしたい。従って本尺度で扱うやさしさは従来からの、常識的に考えられる一般的やさしさである。

(b) 交友関係尺度

尺度構成は上野ら(1994)に準拠し、金子(1995)等も参考に質問項目を補い、10項目(同調傾向：5項目、心理距離：5項目)から成る尺度を作成した。

(c) 外向性尺度

YG性格検査の社会的外向・社会的内向に関する質問項目10項目を採用し、外向性尺度とする。

調査対象：国立大学教育学部学生90名(第1回調査)。同74名(第2回調査)。

調査時期：第1回調査：1996年5月中旬。第2回調査：第1回調査の1週間後。

手続き：「対人態度に関するアンケート」という名目で無記名の質問紙調査が実施された。回答形式は、「どちらともいえない」を中性点とし、「非常に良く当てはまる」から「まったく当てはまらない」までの7件法である。

結果

アンケートから得られた回答をもとに、各測定尺度ごとに次のような分析を行った。

(1) 再検査法による信頼性の検討と項目選択：再検査法による信頼性係数を項目ごとに求め、不適切と思われる項目(Pearsonの積率相関係数が.50より小さいもの)を除き、安定性の高い項目を分析の対象とした。この結果、やさしさ尺度では全24項目中20項目、交友関係尺度では全10項目、外向性尺度では全10項目中7項目がそれぞれ選択された。

(2) 因子分析：選択された項目に対して、各尺度ごとに主因子解による因子分析を行い、バリマックス回転を施した。さらに、因子負荷量の小さいもの、共通性の低いものを分析の対象から除外し、固有値の減少傾向や因子の解釈のしやすさなどを考慮して解を求めた。なお、この

因子分析では、被調査者の慣れや再認性の影響を考へて、第1回調査(5月中旬)のデータを分析の対象とした。各尺度ごとの因子分析・解釈の詳細については後述する。

(3) 下位尺度の信頼性(内的整合性)：因子分析により見出された各尺度ごとの下位尺度(因子)について、それぞれの項目に1-7点を与えて合計したものを下位尺度得点とすると、それぞれの α 係数は次のようになった。まず、やさしさ尺度では、第1因子：.71、第2因子：.73、第3因子：.73、第4因子：.70であった。また、交友関係尺度では、第1因子：.69、第2因子：.71、外向性尺度では、第1因子：.88であり、いずれも、ほぼ満足できる値を示した。再検査法による信頼性の検討と合わせ、それぞれの尺度は内的整合性・安定性の観点から高い信頼性を持つものといえる。

各尺度の因子構造：

(a) やさしさ尺度

選択された20項目に対し分析を試みたところ、「援助・思いやり」因子、「自己犠牲」因子、「あたたかさ」因子、「厳しさ」因子と考えられる4因子が抽出された。

下位尺度の構成にあたっては、因子のまとまりの良さ等を考慮しながら、一つの因子のみに絶対値.35以上の負荷を有する項目を、各因子につき上位から3項目ずつ選定した。これに対し、再度因子分析を行った結果がTable 1である。同様の4因子構造が認められ、第1因子を「自己犠牲」因子、第2因子を「あたたかさ」因子、第3因子を「察し」因子、第4因子を「厳しさ」因子と命名した。

以上の結果から、この12項目でやさしさ尺度を構成することとした。

(b) 交友関係尺度

選択された10項目に対し、因子分析を行った結果、2因子が抽出された(項目の詳細については、Table 4参照)。

第1因子を「心理距離」因子、第2因子を「同

調傾向」因子と命名し、この10項目で交友関係尺度を構成することとした。

(c)外向性尺度

選択された7項目に対し、因子分析を行った結果、1因子が抽出された(項目の詳細について

は、Table 5参照)。

この7項目をもって外向性尺度とする。

以上をもって、やさしさ、交友関係、外向性を測定するための各尺度とした。

Table 1 やさしさ尺度の因子分析結果(回転後)

No	質問項目	F1	F2	F3	F4	h ²
1.	人と接するときは、相手のことを第一に考える。	.783	-.074	.244	.157	.703
2.	人の都合に合わせてたり、人を優先に考える。	.719	-.132	.129	-.041	.553
3.	不愉快に感じてても、多少のことでは怒らない。	.544	.086	.024	-.153	.328
4.	両親や友人・恋人と一緒にいるとあたたかな気持ちになる。	.027	.741	.063	.096	.563
5.	友人と一緒にいると気持ちがやわらぐ。	-.109	.720	.140	.227	.600
6.	両親や友人・恋人と一緒にいると、特に何もなくても自然に顔が笑ってしまうことがある。	-.008	.596	.046	-.008	.358
7.	友人が元気がないときに、すぐ気付いて気遣ってあげる。	-.041	.132	.909	.098	.854
8.	普段から友人の気持ちをよく理解しようとする。	.310	.063	.599	.037	.460
9.	友人がミスをしてても、そっとカバーしてあげる。	.304	.112	.492	.191	.384
10.	相手のためになると思ったら、時には突き放すこともある。	-.004	.175	-.033	.812	.692
11.	場合によっては、相手のためを思って厳しい態度で接する。	-.206	-.089	.212	.707	.595
12.	相手の間違いは厳しく正す。	.119	.271	.135	.500	.356
寄与率(%)		24.8	19.7	13.3	10.0	67.3

研究 3

目的

研究2で作成された質問紙を利用して、対人的文脈におけるやさしさの特徴や、様々な要因の影響を検討し、やさしさの構造と機能・特徴を明らかにする。

方法

質問紙の構成：次の4種類の尺度を合わせて項目ごとにランダムに配置したものをを用いた。

(1)やさしさ尺度(12項目)

(2)交友関係尺度(10項目)

(3)外向性尺度(7項目)：以上3つは、研究2において作成された測定尺度である。

(4)共感性尺度(20項目)：角田(1994)が作成した共感経験尺度改訂版(EESR)を用いた。共感経験尺度改訂版(EESR)は「共感共有経験(SSE)」と「共感共有不全経験(SISE)」という2軸から構成される尺度である。前者は他人と情動を共有した経験(共感できたという経験)を測定するものであり、後者は他人と情動を共有できなかった経験(共感できなかったという経験)を測定するものである。特徴は2点あり、第一は経験を訊ねるという形式をとることで社会的望ましさによる回答への影響を緩和する工夫が凝らされている点である。第二は、共有不全経験(共感できなかった)という観点を盛り込むことにより、共感者(主体)の個性(自他の区別)のあり方を評価することが可能となった点である。これにより、自己中心的な自他認識=

「同情」と、個別性の高い認識に基づいた他者理解＝「共感」とが識別可能になっている。

また、これら2軸の組み合わせから、共感性に関する4類型を設定し、他の人格特性等との関連を検討する際に、有効な指標として活用できるものとなっている。

調査対象：国立大学教育学部1-2年生、221名。内、回答不備の1名と極端に年齢の異なる1名を除いた219名(男子47名,女子171名,不明1名)を分析の対象とした。平均年齢は19.4歳(年齢範囲18-26歳)であった。

調査時期：1996年7月。

手続き：「対人態度に関するアンケート」という名目で無記名の質問紙調査が実施された。回答形式は、「どちらともいえない」を中性点に「非常に良く当てはまる」から「まったく当てはまらない」までの7件法である。

結果

得点化と正規性

4尺度の各項目について、各々の回答に1-7点を与え、得点化した。各尺度(下位尺度)得点分布の正規性を検討したところ(Shapiro-Wilk法)、やさしさ、共感性-共有経験・共有不全経験の得点分布について正規性が確認された。同調傾向・心理距離、外向性の得点分布についてはやや歪みが見られるものの(歪度と尖度はそれぞれ、同調傾向(-.61, .65)、心理距離(.59, .74)、外向性(-.19, -.77))、正規性からのずれは小さいことから、これらに関する統計量は以降の統計処理に十分耐えうるものであると考えた。

Table 2 やさしさ尺度の因子分析結果(回転後)および α 係数

No	質問項目	F1	F2	F3	h^2	α
10.	相手のためになると思ったら、時には突き放すこともある。	.893	.015	.123	.813	.72
11.	場合によっては、相手のためを思って厳しい態度で接する。	.756	.072	.080	.584	
12.	相手の間違いは厳しく正す。	.433	-.080	-.008	.194	
1.	人と接するときは、相手のことを第一に考える。	-.097	.643	-.007	.423	.69
8.	普段から友人の気持ちをよく理解しようとする。	.129	.609	.270	.460	
2.	人の都合に合わせてたり、人を優先に考える。	-.153	.544	.057	.322	
9.	友人がミスをして、そっとカバーしてあげる。	.087	.508	.368	.401	
7.	友人が元気がないときに、すぐ気付いて気遣ってあげる。	.242	.368	.256	.260	
4.	両親や友人・恋人と一緒にいるとあたたかな気持ちになる。	.010	.122	.629	.411	.61
6.	両親や友人・恋人と一緒にいると、特に何もなくても自然に顔が笑ってしまうことがある。	.077	.041	.573	.336	
5.	友人と一緒にいると気持ちがやわらぐ。	.039	.367	.490	.376	
寄与率(%)		26.9	18.4	11.2	56.5	.70

(注) 除外項目：3. 不愉快に感じても、多少のことでは怒らない。

やさしさ等の測定尺度の構造

本調査で対象となったやさしさ、交友関係、外向性、共感性の構造が、研究2および角田(1994)において得られたものと異なるか否かを確認するため、各尺度に対して主因子法による因子分析を行い、バリマックス回転を施した。

(1)やさしさ尺度

因子分析の結果、固有値1.0以上を基準に3因子が抽出された。この内、共通性が低く、解釈の困難であった1項目を除外し、再度因子分析を行った結果がTable 2である。

第1因子は、思いやり・公正さを持ちながらも厳しく接する態度を示す内容である。第2因子は、他者の気持ちの理解や他者への配慮を示す内容である。第3因子は家族や友人に対して感じるあたたかさや安らぎを示す内容である。下位尺度名は各因子の特徴に基づき、それぞれ「厳しさ」因子、「配慮」因子、「あたたかさ」因子と命名した。「厳しさ」「あたたかさ」の両因子は、研究2において抽出された因子と同様であったが、「配慮」因子に関しては、研究2における「察し」因子と「自己犠牲」因子が統合された形となった。

また、尺度全体および各下位尺度の信頼性(内的整合性)を検討した。下位尺度に関しては、3つの因子について、それぞれの項目に1-7点を与えて合計したものを下位尺度得点とした。その結果、尺度全体および各下位尺度ごとのCronbachの α 係数はTable 2のようになった。尺度全体では.70という値が示された。下位尺度別でも項目数の少なさにもかかわらず、ほぼ満足できる値が得られた。

Table 3 下位尺度相関係数 (N=218)

	厳しさ	配慮
配慮	.071	
あたたかさ	.122 +	.365 ***

+ p<.10 *** p<.001

Table 3は、下位尺度間の相関係数を示したものである。「配慮」と「あたたかさ」との間に正の相関が見られた($r=.37, p<.001$)。また「あたたかさ」と「厳しさ」との間にも正の関連性が示唆された($r=.12, p<.10$)。

Table 4 交友関係尺度の因子分析結果(回転後)および α 係数

No	質問項目	F1	F2	h ²	α
1.	仲間はずれにされるのは絶対に嫌だ。	.735	-.192	.577	.78
2.	何をしてもみんなと一緒にだと安心する。	.724	-.189	.559	
3.	できるだけ仲間と同じように行動したい。	.714	-.058	.513	
4.	私は他の人からどう思われているかが気になる。	.594	-.024	.353	
5.	流行遅れになるのはいやだ。	.399	-.174	.190	
6.	私は他の人にあまり深く関わって欲しくない。	-.116	.744	.567	.71
7.	相手の考えていることに口をはさまない。	-.076	.614	.383	
8.	お互いの領分にふみこまない。	-.116	.581	.350	
9.	私は他の人に自分の本当の気持ちを知られたくない。	-.083	.490	.246	
10.	お互いに相手に甘え過ぎない。	-.130	.402	.179	
寄与率(%)		32.3	18.1	50.4	

Table 5 外向性尺度の因子分析結果(回転後)および α 係数

No	質問項目	F1	h ²	α
1.	こちらから進んで友達を作ることが少ない。	.840	.706	.87
2.	誰とでもよく話す。	.832	.693	
3.	新しい友達はなかなかできない。	.796	.633	
4.	人と広くつきあうのが好きである。	.708	.501	
5.	色々な人と知り合いになるのが楽しみである。	.675	.455	
6.	無口である。	.672	.451	
7.	異性(男なら女)の友達はほとんどできない。	.516	.267	
寄与率(%)		59.2		

Table 6 共感性尺度の因子分析結果(回転後)および α 係数

No	質問項目	F1	F2	h ²	α
1.	相手が何かを恐がっている、自分はその恐さを感じなかったことがある。	.748	-.201	.600	.86
2.	不快な気分ている相手からその内容を聞いても、自分は同じように不快にならなかったことがある。	.729	-.006	.531	
3.	相手が何かを腹を立てている、自分はその人の怒りがびんとこなかったことがある。	.665	-.030	.442	
4.	相手が何かを苦しんでいる、自分はその苦しさを感じなかったことがある。	.651	-.139	.443	
5.	相手が何か喜んでいても、自分は嬉しい気持ちにならなかったことがある。	.648	-.205	.463	
6.	相手が「こんなことがあって、とてもびっくりした」と話すのを聞いても、自分は驚いた気持ちにならなかったことがある。	.643	-.216	.460	
7.	相手が楽しい気分でも、自分はその人のように楽しく感じなかったことがある。	.601	-.036	.362	
8.	悲しんでいる相手といても、自分はその人のように悲しくならなかったことがある。	.571	-.105	.337	
9.	相手があることに驚いたと語っても、どうしてそんなに驚くのか分からなかったことがある。	.401	-.113	.173	
10.	相手が何かを期待している、同じようにわくわくしなかったことがある。	.390	-.034	.153	
11.	何かに苦しんでいる相手の気持ちを感じ取ろうとし、自分も同じような気持ちになったことがある。	-.133	.653	.444	.85
12.	相手が「こんなことがあって、とてもびっくりした」と話すのを聞いて、その人の気持ちを感じ取ろうとし、自分も驚いた気持ちになったことがある。	-.102	.648	.431	
13.	相手が楽しい気分になっている場合に、その楽しさを感じ取ろうとし、その人の気持ちを味わったことがある。	-.193	.628	.432	
14.	相手が喜んでいるときに、その気持ちを感じ取って一緒に嬉しい気持ちになったことがある。	-.071	.600	.365	
15.	腹を立てている人の気持ちを感じ取ろうとし、自分もその人の怒りを経験したことがある。	-.056	.583	.444	
16.	相手があることに驚いたと語るとき、その人の驚きを自分も感じ取ったことがある。	-.178	.577	.365	
17.	不快な気分ている相手からその内容を聞いて、その人の気持ちを感じ取ったことがある。	-.213	.575	.376	
18.	相手が何かを期待しているときに、そのわくわくした気持ちを感じ取ったことがある。	-.072	.562	.321	
19.	相手が何かを恐がっているときに、その人の体験している恐さを感じ取ったことがある。	-.158	.562	.341	
20.	悲しんでいる相手の気持ちを感じ取ろうとして、自分もその人の悲しさを経験したことがある。	-.025	.536	.288	
寄与率(%)		28.8	15.5	44.3	

Table 7 やさしさ下位尺度と共感性・交友関係・外向性尺度との相関 (N=215)

	共有経験	共有不全経験	同調傾向	心理距離	外向性
尺度全体	.472 ***	-.236 ***	.034	-.220 **	.488 ***
厳しさ	.182 **	-.081	-.187 **	-.093	.194 **
配慮	.356 ***	-.244 ***	.076	-.117 +	.392 ***
あたたかさ	.439 ***	-.138 *	.209 **	-.264 ***	.412 ***

*** p<.001 ** p<.01 * p<.05 + p<.10

(2) 交友関係尺度

固有値の大きさ及び因子の解釈のしやすさを考慮して因子数を2と設定し、同様の因子分析を行った(Table 4)。その結果、研究2と同様の因子構造が見られた。各下位尺度の α 係数は.78と.71であり、満足できる値が示された(Table 4)。

(3) 外向性尺度

固有値1.0以上で1因子構造であることが示され、研究2の結果を反映した。因子分析結果と α 係数をTable 5に示す。 α 係数は.87と高い値を示し、充分満足できる結果であった。

(4) 共感性尺度

固有値の大きさ及び因子の解釈のしやすさを考慮して因子数を2と設定し、同様の因子分析を行った結果、角田(1994)と同様の因子構造が見出された。第1因子には共有不全経験に関する10項目、第2因子には共有経験に関する10項目が選出された。Table 6は、因子分析結果と下位尺度ごとの α 係数を示したものである。

やさしさ下位尺度と他尺度との関係

Table 7に示すのは、やさしさの3つの下位尺度及び尺度全体の得点と、他の尺度得点との間の相関係数である。特に共有経験、外向性との間に有意な正の相関が顕著に見られた。共有不全経験、心理距離に関しては、全般的に負の関係にある傾向が窺える。また、同調傾向は「厳しさ」因子と $p<.01$ で負の相関が示された。

やさしさに影響を与える諸要因

やさしさを目的変数、共感性(共有経験・共有不全経験の2尺度)と外向性を説明変数とし、Fig. 2のような予測因果モデルを設定して、変数増減法による重回帰分析を行った(ただし、Fig. 2には後述する分析結果も併記してある)。

その結果をTable 8に示す。これによると、自由度調整済み重決定係数(Ra^2)は.359($F=61.302, p<.001$)であり、有意であった。標準偏回帰係数(以下 β)が有意であった変数は、選出順に外向性($\beta=.391, p<.001$)、共有経験($\beta=.373, p<.001$)である。これに対し、共有不全経験は有意ではなかった。

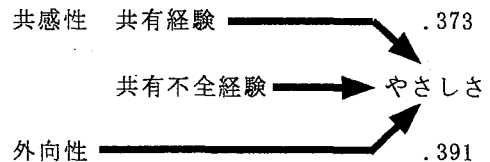


Fig. 2 やさしさと共感性・外向性の因果モデル。

Table 8 やさしさの重回帰分析結果 (N=216)

目的変数	説明変数	標準偏回帰係数	標準誤差
やさしさ	外向性	.391 ***	.049
	共感共有経験	.373 ***	.044

$Ra^2=.359 (F=61.302)$ *** C.V.=8.406 *** $p<.001$

この結果、Fig. 2 に示したやさしさと共感性・外向性によるモデルの妥当性が部分的に確認された。すなわち、外向性と共感性の共有経験がやさしさに正の影響を与えていた。一方、共感性の共有不全経験はやさしさに影響しないことがわかった。

交友関係類型におけるやさしさの特徴

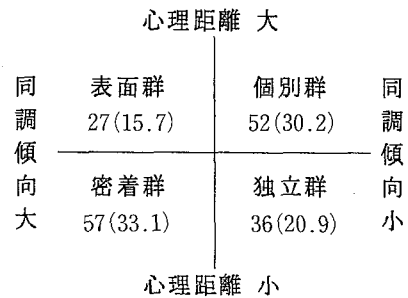
Table 9 は交友関係尺度の「心理距離」および「同調傾向」得点の平均値・中央値・最頻値・標準偏差をまとめたものである。各々の中央値(心理距離：19, 同調傾向：25)を基準に高得点群と低得点群に分け、2 尺度の組み合わせから交友関係の類型化を行った(上野ら(1994)に準拠。Fig. 3 参照)。

この4 類型とやさしさとの関連を見るために、一元配置の分散分析を行った(Table10)。その結果、 $P < .05$ で有意な差が見られた($F(3,168)=3.24$)。Tukeyによる多重比較では、独立群と個別群との間に有意な差が見られた($P < .05$)。すなわち、同調傾向が低い群同士

において、心理距離の小さい(身近である)方が、やさしさ得点が高かった。やさしさの平均値で4 類型を並べると、独立群>密着群・表面群>個別群の順で高得点であった。

Table 9 同調傾向と心理距離の統計値

下位尺度	平均値	中央値	最頻値	標準偏差
同調傾向	24.60	25.00	26.00	4.81
心理距離	19.06	19.00	19.00	4.48



数字は人数。()内は%。

Fig. 3 交友関係の4 類型と各群の構成。

Table 10 交友関係(4 類型)別のやさしさについての平均値(SD)および分散分析結果

		表面群(HH)	密着群(HL)	個別群(LH)	独立群(LL)	F 値
やさしさ	平均値	54.96	54.97	53.08	56.86	3.24 *
	SD	5.30	5.53	5.68	6.00	df=(3, 168)
	人数(%)	27(15.7)	57(33.1)	52(30.2)	36(20.9)	

* $p < .05$ 各群名の()内は、同調傾向・心理距離の高(=H)低(=L)を示す。

考 察

やさしさの構造について

因子分析の結果、やさしさの下位構造として「厳しさ」「配慮」「あたたかさ」の存在が明らかとなった。これらの関係を分析すると、「配慮」と「あたたかさ」との間に弱い正の相関が認め

られた。また「厳しさ」と「あたたかさ」との間にも正の関連性が示唆された。

各因子を構成する項目を見ると「厳しさ」や「配慮」は具体的な行動規範といえる内容であるが、「あたたかさ」は極めて心情的な内容である。こうした、行動が「あたたかな」心情を伴うという点に、やさしさの特徴の一つが示唆される。また、「厳しさ」と「配慮」との間には相

関が見られなかったことから、この2側面は独立であり、やさしさとして互いに異なる表現であると考えられる。

ここで、特に「厳しさ」をやさしさの一側面として捉えることに、抵抗が感じられるかもしれない。だが、これは思いやり等を持った上での「厳しい」態度というものが、やさしさにおいては起こりうるということを、示していると考えられる。つまり、行動の背後に他者の気持ちを推し量る、あるいは他者のためを思うといった要素が潜み、やさしさの一形態として成り立っているという見方である。例えば、「愛の鞭」といった言葉遣いにより表現されるような心情と、同様の意味合いを持つものと思われる。「厳しさ」と「あたたかさ」との間に正の関連性が示唆されたことも、この点によると考えられる。

ただし、やさしさにおける厳しさの位置付けを検討するにあたっては、次の二つの可能性を考慮しなければならない。

(1) 厳しさは確かにやさしさの一部として成立しているという可能性。すなわち、辞書的な意味でのやさしさには、厳しさ・強さ等を示す説明はないが、現代青年にとっては、やさしさは一種の強さを兼ね備えたものであると定義できる、という考えである。

(2) やさしさに潜在的に含まれる「弱さ」に対する補償作用的機能として、「厳しさ」が出現しているという可能性。すなわち、この場合、厳しさはやさしさの内部に組み込まれている側面ではなく、対として現れる影のようなものと想定される。

(1)の視点に立てば、やさしさに「厳しさ」が含まれることに特に問題はない。「現代青年の捉えるやさしさ像」としてそのまま理解し、検討すればよいだろう。だが、(2)の可能性に関して考えると、現代青年がやさしさと呼ぶ概念はいささか複雑なものとなる。本来やさしさとは言えない部分(すなわち「厳しさ」)をもやさしさに含めてしまうこととなり、そのために対人関係

において誤解や軋轢等の問題を生じる可能性も考えられる。

以上のように、やさしさにおける「厳しさ」の意味についてはまだ問題が残されており、慎重な検討が必要とされる。だが、研究1において、やさしさの側面として「厳しさ」が取り上げられたことも事実である。

そこで、ここで認められた下位概念をもとに、次のようなやさしさの仮説的モデルを考えてみたい(Fig. 4)。このモデルでは、実際の行動や心の動きを表わす「配慮」がやさしさの中心近くに位置する。「あたたかさ」は全体的な雰囲気として「配慮」を包み、やさしさのあたたかく、安らいだ印象を形成する。「厳しさ」の位置付けは、自我構造におけるペルソナのような役割を果たすものである。だが、常に「厳しさ」が前面に出るわけではなく、「厳しさ」の発動が要請された時に、背後に「配慮」と「あたたかさ」を潜ませて機能する。平時は「配慮」と「あたたかさ」が主体であり、この両者が軋轢やストレスを解消する潤滑油としても働く。勿論、このモデルは、本研究結果をもとに仮説的に構成されたものであり、今後の検討を必要とするものである。

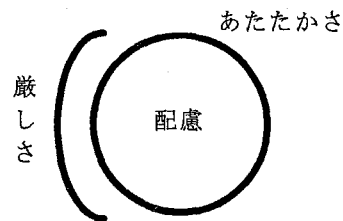


Fig. 4 やさしさのモデル。

やさしさに影響を与える要因について

やさしさが価値でありながら、社会(外界)と関わってゆくための能力であるという定義をもとに、共感性が受信、外向性が発信の役割を果たすことで、やさしさが機能するというモデルを設定した。すなわち、共感性が高く、外向的である人はやさしいと予測された。本研究では

この仮説がおおむね支持されたが、共感性における共有不全経験はやさしさに影響しないことが示された。

外向性については、因子分析結果に示した項目内容(Table5)からもわかるように、主体の関心が積極的に客体に向けられ、社会(外界)に関わっていくとする性質が認められる。こうした社会的な積極性が、対人技能でもあるやさしさへ影響を与えたと考えられる。

共感性については、共有経験がやさしさに影響を及ぼすことがわかった。角田(1994)によれば、共有経験(他者の気持ちに共感できたという経験)とは、他者との情緒的なつながりを持つ経験であり、自己にとって肯定的、快適な経験である。

共感の起こる心的過程では、他者との相互作用の中で自己の内に他者と類似の感情が喚起され、これを意識することで感情が共有される(角田 1994)。感情を媒介に他者理解を図ろうとする点は、やさしさの構造において見出された「配慮」因子の内容と同質であるといえる。こうした、他者の感情(気持ち)を推量するという、外界に対する受信の機能が基礎となり、やさしさに影響を与えていると考えられる。また、単なる機能的なつながりではない、「情緒的なつながり」という性格がやさしさの価値的側面を支え、「肯定的、快適」な性格が、やさしさを望ましい価値として受け入れる態勢に影響を与えているのではないだろうか。

一方、共有不全経験は、他者の気持ちに共感できなかったという経験を通して、個としての自他の区別をはっきりと主体に認識させ、個別性の認識を高めるといふ機能を持つ(角田 1994)。個別性の認識は、共有された感情について、自己中心的な「同情」と、自他の区別を踏まえた真の他者理解である「共感」とを区別する。この共有不全経験がやさしさに対し影響を持たなかったということは、やさしさにとって、自他の個別性という問題は関係しないことを示し、間接的には、やさしさに潜在すると思われる

「一体」「共生」(栗原 1981)といった側面を想起させる。ただし、同時に、個別性が関連しないということは、やさしさが自己中心的な主観に陥り、他者を真に理解しない同情的なものとなる事態もありうるということを示す。自他の相違を意識せずになされるやさしさは独善的なものとなり、かえって対人関係に問題を生じさせると思われる。

やさしさに影響を与える共有経験に関しては、内省的な私的自意識の高さと関連を持つことも示されているが(角田 1994)、個別性が影響を持たず、自意識の高さばかりが強調されるような事態に陥った場合、やさしさは私的世界だけのものとなり、対人技能としての意義も失われることになる。この点には十分留意する必要があるといえよう。

交友関係におけるやさしさの特徴について

交友関係の4類型(表面群・密着群・個別群・独立群)とやさしさとの関連を検討した結果、個別群と独立群との間に差異が認められた。個別群と独立群はともに同調傾向の低い群であり、心理距離の近い独立群の方が有意にやさしさ得点が高かった。心理距離の小さい(身近である)者の方がやさしいという結果は仮説に沿うものであったが、同調傾向を示さない独立群が最もやさしいという結果は予想に反するものであった。一方、同調傾向がともに高い表面群と密着群との間に有意差は認められず、両群間において心理距離の影響は見られなかった。

直観的理解によれば、他者に行動を合わせる者の方がやさしいと思われるが、こうした同調傾向の高さがやさしさと結び付かなかったことに関しては、次のように考えることができよう。ここでの交友関係における同調とは、社会適応的な行動傾向であり、「仲間はずれにならないようにして、とにかく一緒に行動し、遅れたり外れたりしないようにする消極的な」(上野ら 1994)行動である。同調は密着性を高めて集団と親和し、集団へストレスを与えない。これは社

会に対し潤滑油として機能する、やさしさの技能的側面と似た働きである。だが、それはあくまでも社会適応的な方便であり、あたたかな心情や思いやりを含む「配慮」とは異なるものと考えられる。また、同調においては、やさしさのもう一つの側面である「厳しさ」は、内容的に生じ得ない。実際、「厳しさ」と同調傾向との間には負の相関が見られた(Table7)。従って、一見やさしく見える同調だが、情緒的側面を多分に持つやさしさとは別物であると捉えられるのではないだろうか。やさしさは単なる「対人技能」ではなく「価値」でもあるという性質が、関与していると思われる。ただし、やさしさ得点の平均値で見ると、独立群>表面群・密着群>個別群という順序であり、同調傾向の低い個別群よりも同調傾向の高い表面群・密着群の方が高得点であることから、同調にも多少のやさしさが認められることが窺える。社会適応的な方便であっても、やさしさの技能的側面と重なる性質があり、この影響によってやさしさと認められるのだろう。だが、こうしたやさしさは「対人技能」の側面が突出したものであり、「価値」をあまり備えない異質なやさしさであると思われる。

各群ごとに見ると、まず、やさしさ得点の平均値が最も高かった独立群は、心理的には身近であるが表面的な同調はしないという性格の群であり、飾らない親密な交友関係が窺える。上野ら(1994)においても「家庭内よりも友人関係の中でより快適に自由に振る舞える」群であるとされている。こうした性格の群では、やさしさの「配慮」や「あたたかさ」といった側面はもとより、「厳しさ」という側面も発揮されやすいだろう。よって、独立群が最もやさしいという結果が得られたと考えられる。

これに対し、やさしさ得点の平均値が最も低かった個別群は、「他の群に比べて、最も精神的に自立した群」(上野ら 1994)であり、やさしさに潜在すると考えられる「一体」「共生」(栗原 1981)といった概念とも対立する。他群に比して

他者を必要としない自律した性質によって、やさしさが抑制されると考えられる。

一方、表面群・密着群といった同調傾向の高い群では、心理距離による差異は見られなかった。同調から派生する社会適応的なやさしさ(「対人技能」的側面が強調されたやさしさ)の前では、心理距離の遠近による違いは埋没してしまうと考えられ、「価値」を含むやさしさが、「対人技能」として突出したやさしさに対して繊細なことが窺える。この点に関しては今後さらに検討する必要がある。

ここで見られた独立群>表面群・密着群>個別群というやさしさの序列は、「価値としてのやさしさ」>「技能としてのやさしさ」という、青年のやさしさに対する意識を反映した結果といえるのではないだろうか。

まとめ

やさしさという構成概念は肯定的な概念であり、社会的にも望ましい人格特性といえよう。だが、その定義は漠然としたものであり、言葉としての歴史も浅い。にもかかわらず、やさしさという言葉は現代社会に深く浸透し、さらに価値観の曖昧な激変の現代においてその輪郭はますます不鮮明である。本研究では、こうした曖昧な姿しか見せないやさしさの因子的構造を探り、「厳しさ」「配慮」「あたたかさ」という3つの側面を見出した。また、やさしさに影響を及ぼす要因として、社会に関わってゆく際の受信と発信の役割を果たす共感性と外向性の存在を明らかにした。特に共感性に関しては、共有経験の影響はあるものの、自他の個性性を認識させ、同情と共感の違いを意識させる共有不全経験は影響しないことがわかった。ここで、個性性を伴わないためにやさしさが自己中心なものに陥る可能性が窺えた。さらに、やさしさが価値でありながら、ストレスを解消する社会的潤滑油の役割をも兼ね備えているという観点から、やさしさに「価値」と「技能」という二面性を仮定し、交友関係の類型によるやさしさ

の差異を検討した。その結果、同調傾向と心理距離がともに小さい者、すなわち「同調しない身近な者」が最もやさしいことが示された。特に同調傾向に関しては、単に行動を合わせることに、やさしさとは性質の異なるものであることが示唆された。また、ここで、同調傾向から「対人技能」のみに突出した異質なやさしさが派生する可能性が窺えた。

今後の課題としては、まず、仮説的に提示されたやさしさモデルの検証が挙げられる。第一点として、先にも示したが、やさしさにおける厳しさの位置付け(意義)を確定する必要がある。第二点として、「配慮」因子に関する更なる詳細な検討が必要である。研究1の自由記述による回答からは、やさしさの具体像として8つの側面が見られ、研究2で「察し」と「自己犠牲」として抽出された因子は、研究3において「配慮」因子に統合される形となった。こうした結果から、本研究では質問紙作成の段階においてやさしさ像が要約されてしまった可能性も考えられる。やさしさモデルにおいて、最終的に「配慮」という一側面で表現された部分に、さらに多様な下位構造の存在を想定することもできる。この点に関しては再度検討する余地が残された。

また、本研究では被調査者の男女構成にやや偏りが見られたため、検討していないが、やさしさに関する性差も十分考えられる問題であろう。

さらに、共感性や同調傾向の影響によっては、やさしさが変質する可能性が窺えたが、やさしさの行く末を占う意味で、この点の詳細を明らかにする必要がある。

以上に加え、より広範な社会的・発達の観点から、やさしさの実体や対人関係における働き、その社会的意義を明確にしていく必要があると考えられる。

文献

- 角田豊 1994 共感経験尺度改訂版(EESR)の作成と共感性類型化の試み 教育心理学研究, 42, 193-200.
- 金子俊子 1995 青年期における他者との関係のしかたと自己同一性 発達心理学研究, 6, 41-47.
- 栗原彬 1981 やさしさのゆくえ=現代青年論 筑摩書房
- 中田亮雄 1996 やさしさの構造に関する研究 金沢大学教育学部卒業論文(未公刊)
- 大平健 1995 やさしさの精神病理 岩波書店
- 鈴木隆子 1992 向社会的行動に影響する諸要因 -共感性・社会的スキル・外向性- 実験社会心理学研究, 32, 71-84.
- 上野行良・上瀬由美子・松井豊・福富護 1994 青年期の交友関係における同調と心理的距離 教育心理学研究, 42, 21-28.

付記 本稿は、金子の指導に基づき、村井が分析、執筆したものである。